



TITLE:

朱子語類論文篇譯注(一)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

---

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類論文篇譯注(一). 中國文學報 1997, 55: 127-151

ISSUE DATE:

1997-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177802>

RIGHT:

## 朱子語類論文篇譯注 (一)

興膳宏  
京都大學

木津祐子  
同志社女子大學

齋藤希史  
奈良女子大學

### 卷百三十九 論文上

(校勘) 朝鮮古寫本論文上↓作文上 本文の始まる前に「自離騷至唐宋以來及泛論」の見出しが入る。

1 有治世之文、有衰世之文、有亂世之文。六經、治世之文也。如國語委靡繁絮、眞衰世之文耳。是時語言議論如此、宜乎周之不能振起也。至於亂世之文、則戰國是也。然有英偉氣、非衰世國語之文之比也。饒錄云、國語說傳絮、只是氣

朱子語類論文篇譯注 (一) (興膳・木津・齋藤)

衰。又不如戰國文字、更有些精彩。楚漢間文字真是奇偉、豈易及也。又曰、國語文字極困苦、振作不起。戰國文字豪傑、便見事情。非你殺我、則我殺你。黃云、觀一時氣象如此、如何過捺得住。所以啓漢家之治也。偶。

治世の文があり、衰世の文があり、亂世の文がある。六經は治世の文である。『國語』のような弱弱しくくどくどしたものは、まさしく衰世の文だ。當時のことばや議論がこうだったから、周の國運が振るわなかったのも當然だ。亂世の文というのは、戰國のものがそれだ。しかしそこには英傑の氣があつて、衰世の『國語』の文の比ではない。饒錄にいう、『國語』がくどくど述べるのは、ひとえに氣が衰えたからである。戰國の文章がより精彩のあるのに及ばない。楚漢のころの文章はまことに立派で、容易には及ばない。また、こうもいわれた。『國語』の文章は元氣がなくて、奮いたてない。戰國の文章は豪快で、當時の狀況がよくうかがえる。おまえがそれを殺さぬなら、おれがおまえを殺すぞ、といった風にな。」黄がいった。「その時代の氣風がそうであつたなら、どうしてそれを押しとどめられましょう。それで漢王朝の治が開かれたのです

ね」沈僩記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 饒錄→精彩→缺 便見事情→便是事情  
非你殺我→非你殺殺

(注) 「治世」「衰世」「亂世」のように、文章を世のありかたに結びつけて説くのは、まず「毛詩」大序に「治世之音、安以樂、其政和、亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困」とあることが想起される。文章三變という觀點からすれば、「自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變」(沈約『宋書』謝靈運傳論)、あるいは「唐有天下三百年、文章無慮三變」(『新唐書文藝傳』序)なども參考になるが、朱子があくまで世とのかかわりを重視することは注意すべきだろう。一方で朱子は詩についても「三變」説を唱えること、「古今之詩、凡有三變。蓋自書傳所記虞夏以來下及魏晉自爲一等、自晉宋間顏謝以後下及唐初一等、自沈宋以後定著律詩下及今日又爲一等」(『答鞏仲至』『朱文公文集』卷六四)と述べるごとくだが、ここでは詩それ自體の發展に力點が置かれている。なお、世を「三」に分かつのは、公羊學において「所見世」「所聞世」「所傳聞世」に分かつ(『春秋公羊傳』隱公元年注)ことと共通し、のちに康有爲がそれにもとづいて「據亂世」「升平世」「太平世」の三世を唱えたことも、このこと類似しよう。なお「衰世」の語は、『易』繫辭下に「於稽其類、其衰世之意邪」と見える。

「國語委靡繁絮」のように、いったいに「國語」の文章に

對する朱子の見解は厳しく、「戰國漢唐諸子」においても「國語文字多有重疊無義理處。蓋當時只要作文章、說得來多爾」(一二七、3253)のようにいい、また、「又如國語家語、雖非偽書、然其詞繁冗、恐反爲正書之累」(『答余正甫』『朱文公文集』卷六三)などのことばも、このこと共通するものとして挙げられる。

「委靡」は、弱々しいこと。「泊與淡相遭、頽墮委靡潰敗、不可收拾、則其於書得無象之然乎」(韓愈『送高閑上人序』)。「繁絮」は、簡潔でなくどくどくしいこと。「繁碎」と同じ。「語類」の例としては、「大凡禮制欲行於今、須有一箇簡易底道理。若欲盡拘古禮、則繁碎不便於人、自是不可行、不曉他周公當時之意是如何」(『中庸二 第一八章』六三・1255)など。

「英偉」は、堂々たるさま。時期の近い用例としては、「維西方挺特英偉之氣」(蘇軾『鳳翔太白山祈雨文』)など。

「饒錄」は、宋の李性傳が黃徹ら四十餘家の筆録を整理・編纂し、朱子語類錄四十六卷として刊行したもの。嘉熙二(一二三二)年の序がある。性傳の兄道傳が編纂した「池錄」に次いで古い「朱子語類」のテキスト。

「精彩」は「精采」とも書く。古くからある語で、文彩の意でも用いられるが、ここでは、「語類」での他の用例と同じく、文章に生氣があることをいう。「國語」與「左傳」似出一手、然「國語」使人厭看、如齊・楚・吳・越諸處又精

采。】〔春秋 綱領〕八三・二四七)

「奇偉」は「英偉」と同じく、堂々たるさまをいう。「太史公曰、……余以爲其人計魁梧奇偉、至見其圖、狀貌如婦人好女。」〔史記〕留侯世家)

「困善」は、底本とした中華書局本は「善」を「苦」に作るが、朝鮮古寫本・古活字本ならびに明成化九年序刊本、朝鮮刊本などみな「善」につくり、「苦」に作るのは、他に和刻本のみである。また、語類に「董仲舒文字却平生、只是又困善。仲舒・康衡・劉向諸人文字、皆善弱無氣焰、司馬遷・賈生文學、雄豪可愛。」〔訓門人 四〕一一六・二八〇)とある箇所についても同様で、中華書局本および和刻本のみが「只是又困」に作る。この語は辭書類にも見えず、「困苦」に作るのも或いは後人が意の取りがたきを以て改めたものかと思われるが、しばらく諸本の「困善」と作るのに従い、氣力の無い、軟弱なことをいう意に解した。

「黃云」とある「黃」は、記錄者の沈僩と同時期の弟子であれば、黃崱・黃卓・黃義剛らが考えられるが、そのいずれかは未詳。

「遏捺」はおさえこむこと。「又如人有喜做不要緊事、如寫字作詩之屬。初時念念要做、更遏捺不得。若能將聖賢言語來玩味、見得義理分曉、則漸漸覺得此重彼輕、久久不知不覺自然剝落消殞去。」〔訓門人 一〕一一一・二七六)

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

2 楚詞不甚怨君。今被諸家解得都成怨君、不成模樣。九歌是托神以爲君、言人間隔、不可企及、如已不得親近於君之意。以此觀之、他便不是怨君。至山鬼篇、不可以君爲山鬼、又倒說山鬼欲親人而不可得之意。今人解文字不看大意、只逐句解、意却不貫。楚詞。

「楚辭」はそれほど主君を怨んではいけない。今ではすべて主君を怨んだものとして諸家に解釋されているが、それではお話にならない。「九歌」は、主君を神に假託したもので、人間が神から隔たってしまったて、求めても會えないのは、自分が主君に近づくことができないのと同じだ。こうしてみると、『楚辭』は、主君を怨んではいけない。「山鬼篇」などは、主君を「山鬼」とみなすわけにはいかず、逆に山鬼が人間に近づこうとしてもできない思いをいつているのである。いまの人は、文章を解釋するのに、大意を見ずに、ただ一字一句を追いかけて解釋するから、意味がかえって通らなくなる。以下「楚辭」をいう。

(校勘) 朝鮮古寫本 楚詞(末尾) ↓庚

朝鮮古活字本 已不得親近於君之意 ↓已不得親近於君之意

〔注〕「模様」は、現代中國語の「様子」(さま)に同じ。  
 「然荆公氣習、自是一箇要遺形骸・離世俗底模様、喫物不知飢飽」(本朝四 自熙寧至靖康用人) 一一〇・3109  
 「不成模様」、また反語形の「成甚模様」で、お話にならないことをいい、現代語で「不成様子」「不像様子」というのと同じ。  
 「如所謂『僕人乃立於車柱之外後角』、又忍立不住、却以采帛繫於柱上、都不成模様。」(禮四 小戴禮) 八七・267  
 「常人逼迫、但聞得些善言、寫得些文字、便自寶藏之、以爲己物、皆他人所不得知者、成甚模様。」(論語二 學而篇上) 二〇・451 など。

「間隔」は、へだて、距離、齟齬。「蓋本從一源中流出、初無間隔、雖天地山川鬼神亦然也。」(鬼神) 三・52

「企及」は、爪先立つて近づこうとすること。「聖人制禮、賢者俯就、不肖企及。」(後漢書) 陳蕃傳

「親近」は、近づく、親しむこと。「始皇甚尊寵蒙氏、信任賢之、而親近蒙毅、位至上卿。」(史記) 蒙恬傳

「楚辭」が書かれた動機については、つとに『史記』屈原賈生列傳が「屈平之作離騷、蓋自怨生也」と記すごとく、自らの言が容れられず斥けられたことによる憂憤を語るとされてきたが、必ずしもそれは君主を直接恨む「怨君」ということではない。それを最初に指弾したのは、屈原を「露才揚己」と評した班固であり、その「離騷序」には「然賁數懷王、怨惡椒蘭、愁神苦思、強非其人、忿懣不容、沈江而死、亦貶

絜狂狷景行之士」という。王逸はそれに反駁して『楚辭章句』を編んだのだが、朱子は洪興祖『楚辭補注』も含め、舊注に激しく反撥する。『楚辭集注』序には「而獨東京王逸章句與近世洪興祖補注並行於世、其於訓詁名物之間、則已詳矣。顧王書之所取舍、與其題號離合之間、多可議者、而洪皆不能有所是正。至其大義、則又皆未嘗沈潛反復、嗟嘆咏歌、以尋其文詞指意之所出、而遽欲取喻立說、旁引曲證、以強附於其事之已然。是以或以迂滯而遠於性情、或以迫切而害於義理。」と述べられ、また語類にもいう、「且屈原一書、近偶闕之、從頭被人錯解了。自古至今、訛謬相傳、更無一人能破之者、而又爲說以增飾之。看來屈原本是一箇忠誠惻怛愛君底人。觀他所作離騷數篇、盡是歸依愛慕、不忍捨去懷王之意。所以拳拳反復、不能自己、何嘗有一句是罵懷王。」(戰國漢唐諸子) 一三七・3258

また、『山鬼篇』を例に、「臣」と「君」との埋めようもない隔たりを「鬼」と「人」との距離に假託すると述べる本條の考えは、『楚辭集注』では次のように語られる。「九歌者、屈原之所作也。昔楚南郢之邑、沅・湘之間、其俗信鬼而好祀、其祀必使巫覡作樂、歌舞以娛神。……原既放逐、見而感之、故頗爲更定其詞、去其泰甚、而又因彼事神之心、以寄吾忠君愛國眷戀不忘之意。是以其言雖若不能無嫌於燕昵、而君子反有取焉。此卷諸篇、皆以事神不答而不能忘其敬愛、比事君不合而不能忘其忠赤、尤足以見其懇切之意。舊說失之、今悉更

定。「九歌」序、「以上諸篇、皆爲人慕神之詞、以見臣愛君之意。此篇鬼陰而賤、不可比君、故以人況君、鬼喻己、而爲鬼媚人之語也。若有人者、既指鬼矣、子則設爲鬼之命人、而予乃爲鬼之自命也。言人悅己之善爲容也。」（「山鬼」第一章注）

3 問離騷卜居篇內字。曰、字義從來曉不得、但以意看可見。如突梯滑稽、只是軟熟迎逢、隨人倒、隨人起的意思。

如這般文字、更無些小窒礙。想只是信口恁地說、皆自成文。林艾軒嘗云、班固揚雄以下、皆是做文字。已前如司馬遷司馬相如等、只是恁地說出。今看來是如此。古人有取於登高能賦、這也須是敏、須是會說得通暢。如古者或以言揚、說得也一件事、後世只就紙上做。如就紙上做、則班揚便不如已前文字。當時如蘇秦張儀、都是會說。史記所載、想皆是當時說出。又云、漢末以後、只做屬對文字、直至後來、只管弱。如蘇頌著力要變、變不得。直至韓文公出來、盡掃去了、方做成古文。然亦止做得未屬對合偶以前體格、然當時亦無人信他。故其文亦變不盡、纔有一二大儒略相效、以下並只依舊。到得陸宣公奏議、只是雙關做去。又如子厚亦自

有雙關之文、向來道是他初年文字。後將年譜看、乃是晚年文字、蓋是他效世間模樣做則劇耳。文氣衰弱、直至五代、竟無能變。到尹師魯歐公幾人出來、一向變了。其間亦有欲變而不能者、然大概要變。所以做古文自是古文、四六自是四六、却不滾雜。賀孫。

「離騷」卜居篇のことばについて質問した。いわれるには、「ことばの意味はもとからわからないのだが、大意をつかんで讀めば分かる。例えば、「突梯滑稽」などということばは、のらりくらりと迎合しているばかりで、人が轉べば自分も轉び、人が立てば自分も立つ、という意味である。このような文は、なにもひっかかるころはない。思うに、これらは、ただ口から出るままにいったことが、みなおのずと文章となったものだ。林艾軒はこんなことをいっていた。「班固・揚雄以後はみな作った文章だ。それ以前司馬遷・司馬相如らは、もっぱらこんな風に口で述べたのだ。」いま考えてみるとそのとおりだ。古人は「高きに登りて能く賦す」ことを重んじたが、これもまたすばやく、すらすらというのが大切だということだ。古くは「或

いは言を以て揚」げたというように、しゃべるのもまたそれで一つのことだったのに、後世では紙の上で作文するだけになってしまった。紙の上で作るとなれば、班固や揚雄はそれ以前の文章にかなわない。昔、蘇秦・張儀といった人は、みなしゃべるのを得意とした。『史記』に書いてあることは、思うにみな當時口に出されたものだ。また、次のようにいわれた、「漢末以降は、駢體の文ばかり作って、ずっと後まで、ひたすら弱々しい。蘇頌などはそれを變えようとしてがんばったが、變えられなかった。韓文公が現れるに至って、すべてを一掃して、はじめて古文を作り上げたのだ。しかしそれもまた、まだ駢文が登場する以前の文體のように作っていたに過ぎず、當時はやはり信奉されなかった。だからその文もやはり變革しつくせず、わずかに一二の大儒がいくらか倣いはしたものの、そのほかはそろつてもとのままだった。陸宣公の奏議になると、もっぱら駢體で作っている。また柳子厚のような人にも駢體の文があり、ずっと私はその初期の文章だろうと思っていた。後に年譜を見ると、なんと晩年の文章だったか、思う

に彼は世間の様子を眞似てふざけたのだろう。文氣は衰えてゆき、五代に至つても、とうとう變えることができなかった。尹師魯や歐公ら數人が出現するに至つて、すっかり變つたのだ。そのころには變えようとして變えられない者もいるにはいたが、たいがいみな變えたのである。だから、古文を作ればおのずと古文、四六文を作ればおのずと四六文になつて、混同することがなくなった。」葉賀孫

（校勘） 朝鮮古寫本 問離騷卜居篇內字↓賀孫離騷卜居篇內字 軟熟↓軟孰 道↓看道 滾↓滾 賀孫（末尾）↓美厥靈根

朝鮮古活字本 滾↓滾

（注）「突梯」「滑稽」はそれぞれ雙聲の語だが、四字でとらえると、一字を隔ててそれぞれ疊韻の關係にある。『集注』は「將突梯滑稽、如脂如韋、以契楹乎。」に注して、「突、吐忽反。滑、音骨。稽、音雞。……突梯、滑達貌。滑稽、圓轉貌。」という。

「軟熟」は、のらりくらりしたさま。「彼委靡軟熟、儉生自私者、眞畏人也哉。」（『新唐書』忠義傳序）

「迎逢」は人の意を迎えること。「逢迎」に同じ。

「室癡」は、讀書法篇下59條譯注參照。

「林文軒」は、名を光朝、字を謙之といひ、莆田の人、陸

子正の門人。『宋史』卷四三三に傳が見える。『宋元學案』卷四七に、「艾軒學案」が立てられ、「晦翁于艾軒無貶詞」と朱熹の艾軒評を挙げ、また艾軒の言もいくつか拾うが、本條と關わりあるものとしては「道之本體、全于太虛。六經既發明之、後世注解已涉支離、若復增加、道愈遠矣」があるのみである。『直齋書錄解題』には「艾軒家傳」一卷が載録されるが、今に傳わらない。

「登高能賦」は、『詩經』鄘風「定之方中」に「卜云其吉」とある句の毛傳に、君子の九つの能事の一つとして「升高能賦」を擧げるのにもとづく。

「或以言揚」は、『禮記』文王世子の「凡語于郊者、必取賢斂才焉。或以德進、或以事舉、或以言揚」を蹈まえる。

「蘇秦」「張儀」はいずれも戰國の縱橫家、『史記』卷六九および七〇にそれぞれ傳がある。

「屬對」は「對屬」としても同じ。一般に對句をいうが、ここで「屬對文字」というのは、駢體の文をつづること。

『朱子文集』卷三九「與楊宋卿」に「用韻屬對比事造辭之善否。今以魏晉以前諸賢之作考之、蓋未有用意於其間。」

「蘇頌」は、北朝の蘇綽の誤記もしくは思い違いだろう。

『周書』蘇綽傳に「自有晉之季、文章競浮華、遂成風俗、太祖欲革其弊、因魏帝祭廟、羣臣畢至、乃命綽爲大誥、奏行之。」とあり、六朝の華美な文體を改めようとしたことがわかる。

「新唐書」韓愈傳に、韓愈の古文を述べて次のようにいう。「每言文章自漢司馬相如・太史公・劉向・揚雄後、作者不世出、故愈深探本元、卓然樹立、成一家言。其原道・原性・師說等數十篇、皆奧衍闡深、與孟軻・楊雄相表裏、而佐佑六經云。至它文造端置辭、要爲不襲蹈前人者。然惟愈爲之、沛然若有餘、至其徒李翱・李漢・皇甫湜從而效之、遽不及遠甚、從愈游者、若孟郊・張籍、亦皆自名於時。」本條の「一二大儒」も、ここにみえる李翱・李漢・皇甫湜や孟郊・張籍などを念頭に語られるものであろう。

「陸宣公」は唐の宰相陸贄のこと。既に宋代にその奏議を集めた『陸宣公奏議』二十巻が行われていたことが、『直齋書錄解題』卷二「章奏類」に見える。朱子の評價は「陸宣公奏議極好看。這人極會議論、事理委曲說盡、更無滲漏。」(『歷代三』一三六・38)のように高いが、「人言陸宣公口說不出、只是寫得出」(同)とのことは、本條の議論と通底しているかもしれない。

「雙關」は、掛けことばを用いて二つの意を明らかにしようとする技法を指すこともあるが、本條では對句ひいては駢體文という意で用いていることは明らかである。

宋代に行われた柳宗元の年譜には、紹興中、知柳州事文安禮の撰による『柳子厚年譜』一卷がある。「祭井文」などの戲文は元和十一年、すなわちその死の三年前に書かれているが、朱子はこれを指していたものか。



「則劇」は疊韻の語。ふざける、いたづらをするさまをいう。「此等議論、恰如小兒則劇一般、只管要高去、聖門何嘗有這般說話。」（自論爲學工夫）一〇四・3619）「說東漢誅宦官事、云、欽夫所說、只是翻騰好看、做文字則劇、其實不曾說著當時事體。」（歷代二）一三五・3331）など、「語類」にも用例は多い。

「文氣」は文章の氣象。尹師魯は尹洙、歐公は歐陽修をいい、「宋史」のそれぞれの傳に、本條と相通ずる語が見える。「尹洙、字師魯、河南人、少與兄源俱以儒學知名。……洙內剛外和、博學有識度、尤深於春秋。自唐末歷五代、文格卑弱、至宋初、柳開始爲古文、洙與穆脩復振起之。『宋史』卷二九五）「歐陽修、字永叔、廬陵人。……宋興且百年、而文章體裁、猶仍五季餘習、鏤刻駢偶、渙忽弗振、士因陋守舊、論卑氣弱、蘇舜元舜欽・柳開・穆修輩、咸有意而張之、而力不足。……初、范仲淹之貶饒州也、修與尹洙、余靖皆以直仲淹見逐、目之曰黨人、……論曰、三代而降、薄乎秦・漢、文章雖與時盛衰、而藹如其言、曄如其光、皦如其音、蓋均有先王之遺烈、涉晉・魏而弊、至唐韓愈氏振起之、唐之文、涉五季而弊、至宋歐陽脩又振起之。」（『宋史』卷三一九）

4 楚些、沈存中以此爲咒語、如今釋子念沙婆訶三合聲、而巫人之禱亦有此聲。此却說得好。蓋今人只求之於雅、而

不求之於俗、故下一半都曉不得。道夫。離騷叶韻到篇終、前面只發兩例。後人不曉、却謂只此兩韻如此。至。

『楚辭』の「些」については、沈存中は「些」をまじないの語とみなしており、いま僧侶が唱える「娑婆訶」三字の合聲で、呪術師の祈禱にもその發聲があるという。なかなかまい説明だ。思うに、いまの人は雅な方に求めるばかりで、俗な方に求めないから、あと半分がさっぱり理解できない。道夫記す。『離騷』の叶韻は篇の最後まで一貫しているが、前にただ二つほど例を擧げてあるにすぎない。のちの人はそれがわからず、この二つの韻だけがそうなのだと思っている。楊至記す。

（校勘）朝鮮古寫本 巫人↓卒人 離騷↓至↓缺

（注）「些」について、沈括は「夢溪筆談」卷三辨證一で、以下のようにいう。「楚詞招魂尾句皆曰「些」。今夔峽・湖湘及南北江獠人凡禁呪句尾皆稱「些」。此乃楚人舊俗、即梵語「薩嚩訶」也。三字合言之、即「些」字也。ただし、この説については、早く葉夢得が反駁しているように、とくに「些」の語源を梵語に求める部分については、異論が多い。洪興祖『楚辭補注』もまた沈括の説を引くが、「此乃楚人舊俗」までにとどめており、梵語云々は引かない。なお「娑婆

訶」は、*sada*、ヴェーダの祭祀において供物を神々に捧げる時に唱えた文句に由來するという。

「只是兩韻」は『楚辭集注』で「降、叶乎攻反」「能、叶奴代反」とすることを指しているようが、朱子の「叶韻」の捉え方は、「詩一綱領」(八〇・2079)に次のように表わされる。「問、詩叶韻、是當時如此作。是樂歌當如此。曰、當時如此作。古人文字多有如此者、如正考父鼎銘之類。」同じく「詩一綱領」では、『楚辭』の叶韻について、本條に通ずる言も記録される。「詩之音韻、是自然如此、這箇與天通。古人音韻寬、後人分得密後、隔開了。離騷注中發兩箇例在前、朕皇考曰伯庸、庚寅吾以降、又重之以脩能、初秋蘭以爲佩。後人不曉、却謂只此兩韻如此。某有楚辭叶韻、作子厚名字、刻在漳州。」(2079)「……今只從吳才老舊說、不能又創得此例。然楚辭『紛余既有此內美兮、又重之以修能』、『能』音「耐」、然後下文「初秋蘭以爲佩」叶。若「能」字只從本音、則「佩」字遂無音。如此、則又未可以頭一韻爲定也。」(2080)

このように、朱子は『詩經』『楚辭』の押韻が通常とは異なることを、當時の韻がそもそもそのようにひろく押韻していたのであっていぶかる必要はないという。ただ、その理解のためには叶韻の考えをとらねばならず、その中でも吳棫、字は才老の説に全面的に依據するべきであると述べる。吳棫の叶韻説はその著「韻補」によって明らかにすることができ

るが、顧炎武の批判(『音論』中「古詩無叶音」「余實深慨而歎息之、竊念少好楚辭、楚辭之中、尤好屈宋、一一以古音讀之、聲韻頗諧、故復集此一篇公之同好。」)を俟つまでもなく、いまその説によることはできない。

5 楚詞注下事、皆無這事。是他曉不得、後却就這語意撰一件事爲證、都失了他那正意。如淮南子山海經、皆是如此義剛。

『楚辭』の注に書いてある事柄は、どれもみな事實でない。これは注者が理解できず、あとでその語意についてある事柄を付會し證據だてようとして、眞意を失つてしまつたのだ。『淮南子』とか『山海經』を引くのは、どれもそうだ。黃義剛記す。

(注) 朱子の舊注に對する不滿については第2條注を參照。

『淮南子』『山海經』については、とくに『楚辭辨證』下「天問」において、舊注がこの二書を根據に注を施した箇所を具體的に列擧・論難し、さらに「大抵古今說『天問』者、皆本此二書。今以文意考之、疑此二書本皆緣解此『問』而作、而此『問』之言、特戰國時代俚俗相傳之語、如今世俗僧伽降無之祈・許遜斬蛟蜃精之類、本無稽據、而好事者遂假託撰造

以實之。明理之士、皆可以一笑而揮之、政不必深與辯也。」  
という。

6 高斗南解楚詞引瑞應圖。周子充說館閣中有此書、引得  
好。他更不問義理之是非、但有出處便說好。且如天問云、  
啓棘賓商。山海經以爲啓上三賓於天、因得九歎九辨以歸。  
如此、是天亦好色也。柳子厚天對、以爲賓嬪、說天以此樂  
相傳換得。某以爲棘字是夢字、商字是古文篆天字。如鄭康  
成解記衣衰作齊衰、云是壞字也、此亦是擦壞了。蓋啓夢賓  
天、如這般等處、一向恁地過了。陶淵明詩、形夭無千歲。  
曾氏攷山海經云、當作形天舞干戚。看來是如此。周子充不  
以爲然、言只是說精衛也、此又不用出處了。夔孫。

高斗南は『楚辭』を解釋するのに『瑞應圖』を引いてい  
る。周子充はこの『瑞應圖』は館閣の書庫にあり、うまい  
引用だ、という。彼は義理の是非はまったく問わず、ただ  
典據があれば、うまいというのだ。たとえば、『天問』篇  
に「啓棘賓商」とあるのを、『山海經』に啓が三嬪を天に  
献上して、それで「九歎」「九辨」を得て歸ったとするが、

もしそうなら、天もまた色を好むことになる。柳子  
厚の「天對」はこれを「賓嬪」と解して、天はこの音楽を  
「嬪」と交換したのだという。私は「棘」の字は「夢」の  
字で、「商」の字は古えの篆文の「天」の字だと考えてい  
る。鄭康成が禮記の「衣衰」を「齊衰」と解して、これ  
（衣）は壞字だというのと同じで、これ（棘・商）もまた  
字が磨滅してしまったものだ。つまり「啓は天に賓せらる  
るを夢む」ということで、趙簡子が上帝を夢に見た類のこ  
とだ。「天に賓せらる」とは、天の賓客となつて、天がそ  
の音楽を與えたということである。今の人は古書をちつと  
も讀まないの、こうした箇所では、ずっとこんなあやま  
りをおかすことになる。陶淵明の詩に「形夭無千歲」とあ  
るが、曾氏は『山海經』に照らして「當に『形天舞干戚』  
に作るべし」という。見たところその通りだ。周子充はそ  
れに賛成せず、精衛のことを述べたまでだという。今度は  
典據があるのに用いていない。林夔孫記す。

（校勘）朝鮮古寫本 卷一四〇（底本では卷一三八）「雜類」  
所收 於↓于 蓋啓夢賓天如趙簡子夢上帝之類↓蓋啓夢賓大

如趙簡子夢上帝之類 當作形天舞干戚 ↓ 當作形天舞干戚  
(注) 「高斗南」は未詳。周子充すなわち必大の「高唐叔變離騷序」(文忠集卷五三)に「今高君元之復著變離騷九篇」とある高元之のことか。ただしこの「序」には「瑞應圖」のことは觸れられていない。

「瑞應圖」は、『直齋書錄解題』卷十に「瑞應圖十卷 不著名氏。案唐志有孫柔之瑞應圖記・熊理瑞應圖譜各三卷、顧野王符瑞圖十卷、又祥瑞圖十卷。今此書名與孫・熊同、而卷數與顧合、意其野王書也。」と録される。

「啓棘賓商」について、柳宗元は「問、啓棘賓商、九辯九歌。對、啓達厥聲、堪輿以叩。辨同容之序、帝以留嬪」(『柳宗元集』卷十四「天對」)という(中華書局本は本條の「留」を「胸」と作るが、これは正中書局本などが「留」に作るのと同様、轉寫の誤りと判斷し、『柳宗元集』のごとく「留」に改めた)。朱子は『楚辭集注』卷三で「棘、賓商、未詳。」とした上で「竊疑棘當作夢、商當作天、以篆文相似而誤也。蓋其意本謂啓夢上賓於天、而得帝樂以歸、如列子・史記所言、周穆王・秦穆公・趙簡子夢之帝所、而聞鈞天廣樂、九奏萬舞之類耳。」といい、また『楚辭辯證』下でも「啓棘賓商四字、本是啓夢賓天、而世傳兩本、彼此互有得失、遂至紛紜不復可曉。蓋作山海經者所見之本、夢天二字不誤、獨以賓嬪相似、遂誤以賓爲嬪、而造爲啓上三嬪于天之說、以實其謬。王逸所傳之本、賓字幸得不誤、乃以篆文夢天二字中間壞減、獨存四

外、有以棘商、遂誤以夢爲棘、以天爲商、而於注中又以列陳宮商爲說。洪則既引三嬪以注騷經、而於此篇、反據王本而解爲急於賓禮商契、以今考之、凡此三家、均爲穿鑿。……獨柳子留嬪之對、似覺山海之謬、然亦不能深察而明著之、是以其義雖正、而亦不能以自伸也。」と論じる。

「鄭康成解記」は、『禮記』檀弓下の「衣衰而繆纓經」「鄭注曰、衣當爲齊、壞字也」を指したものの。

「趙簡子」が夢に天に上ったことについては、『史記』趙世家に「趙簡子疾、五日不知人、……簡子寤、語大夫曰、我之帝所、甚樂、與百神游於鈞天・廣樂・九奏・萬舞、不類三代之樂、其聲動人心。」とある。

「曾氏」は、曾紘。莫友芝翻宋刊本『陶淵明集』は「讀山海經詩」第十の「形天無千歲、猛志故常在」の句について曾紘の言として「……且疑上下文義不甚相貫、遂取山海經相校、經中有云、刑天、獸名也、口中好銜干戚而舞。乃知此句是刑天舞干戚、故與下句猛志固常在意旨相應。……」と引く。周必大は「二老堂詩話」において同じく曾紘の説を引き、「余謂紘說固善、然靖節此題十三篇、大概篇指一事、如前篇終始記夸父、則此篇恐專說精衛、銜木填海、無千歲之壽、而猛志常在、化去不悔、若併指刑天、似不相續、又況末句云、徒設在昔心、良晨詎可待、何預干戚之猛耶。」とする。なお「語類」「論文」下にも、この「讀山海經詩」について、「或問、「形天無千歲」改作「刑天舞干戚」、如何。」曰、「山海經分

明如此說、惟周丞相不信改本。……」(一四〇・3325)のようについて。

7 古人文章、大率只是平説而意自長。後人文章務意多而酸澀。如離騷初無奇字、只恁地說將去、自是好。後來魯直恁地著力做、却自是不好。方子。道夫錄云、古今擬離騷之作、惟魯直爲無謂。

古人の文章は、だいたいほもつぱら平易に述べて意はおのずと深長だ。後人の文章は意を盛りこもうとしてかえつて口当たりが悪い。『離騷』などちつとも難しい文句などなく、おもむくままに述べていきながら、おのずとすばらしい。のちに黄魯直はあやつて力んで作っているのに、よくない。方子記す。道夫の記録には云う、『離騷』の古今の擬作のうち、魯直のだけがつまらない。

(校勘) 朝鮮古寫本 道夫↓無謂↓缺

(注) 「酸澀」は「惜哉結實小、酸澀、如棠梨」(杜甫「病橘」)のごとく味の澁くて酸っぱいことをいうが、文章の小難しいことにも喩えとしてしばしば用いられる。

朱熹「楚辭後語」は黄庭堅「毀璧」を収録して、「庭堅以

能詩致大名、而尤以楚辭自喜。然以其有意於奇也泰甚、故論者以爲不詩若也」だが、「毀璧」のみは「不暇於爲作」なるがゆえに、他の作にまざるとする。

8 古賦須熟看屈宋韓柳所作、乃有進步處。入本朝來、騷學始絕、秦黄晁張之徒不足學也。雉。

古賦は屈原・宋玉・韓愈・柳宗元の作を熟讀してこそ、進歩するところがある。本朝になってから、騷學はほとんど絶えた。秦觀・黄魯直・晁補之・張耒などの輩は學ぶに足りん。吳雉記す。

(校勘) 「古賦須熟」は底本では「古賦雖熟」に作るが、朝鮮古寫本・古活字本・刊本に従って改めた。朝鮮古寫本第26條の後に位置する

(注) 「古賦」は、ここでは『楚辭』の系譜を繼ぐ騷體の賦のことを指す。『離騷』をモチーフとした作品を集成したのが王逸の『楚辭章句』であるように、「楚辭」とは一連の擬作の系譜でもある。宋代に入ってもその制作は(朱子の評價はともかく)衰えず、歴代の楚辭系の作を集めたアンソロジーもしばしば編まれた。なかでも晁補之の『續楚辭』『變離騷』が有名だが、残念ながら今に傳わらない。おそらく秦

觀・黃魯直・晁補之・張耒らの作品も、そこに收められていたのであろう。朱子の『楚辭後語』はそれに増刪を加えて成ったもので、荀卿の「成相」を劈頭におき、韓愈の作は「復志賦」「閔己賦」「別知賦」「訟風伯」「弔田橫文」「享羅池」「琴操」の七篇を載せ、柳宗元の作は「招海賈文」「懲咎賦」「閔生賦」「夢歸賦」「弔屈原文」「弔荑弘文」「弔樂毅文」「乞巧文」「憎王孫文」の九篇を載せる。

9 荀卿諸賦縝密、盛得水住。歐公蟬賦、其名曰蟬。這數句也無味。雉。

荀卿の諸賦は緻密で、水も漏らさない。歐公の「蟬賦」に「其の名を蟬と曰う」とあるが、この數句はつまらない。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 『荀子』には「賦篇」があり、「此有物」の句で始まる謎かけの問答形式の賦が集められているが、「蟬賦」すなわち歐陽修の「鳴蟬賦」(『宋文鑑』卷三)はそれに倣ったものである。中に「吾不知其何物、其名曰蟬」の句が見える。

10 楚詞平易。後人學倣者反艱深了、都不可曉。

朱子語類論文篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

『楚辭』は平易だ。後人の模倣作は反對に難しくなってしまうて、ちつとも分らない。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 第8條注參照。

11 漢初賈誼之文質實。晁錯說利害處好、答制策便亂道。

董仲舒之文緩弱、其答賢良策、不答所問切處、至無緊要處、又累數百言。東漢文章尤更不如、漸漸趨於對偶。如楊震輩皆尙識緯、張平子非之。然平子之意、又却理會風角・鳥占、何愈於讖緯。陵夷至於三國兩晉、則文氣日卑矣。古人作文作詩、多是摸倣前人而作之。蓋學之既久、自然純熟。如相如封禪書、模倣極多。柳子厚見其如此、却作貞符以反之、然其文體亦不免乎蹈襲也。人傑。漢文。

漢の初期、賈誼の文は質實である。晁錯は利害を説くところはよいが、對策となるとでたらめをいつている。董仲舒の文はしまりがなく、彼の「答賢良策」は、肝腎な問いには答えず、どうでもよいところで、數百言を費やしている。東漢の文章となるとさらにだめで、次第に駢文へと向

かつてゆく。楊震のような連中はみな讖緯をたつとんだが、張平子はそれを批判した。しかし彼の考えでは、風角や鳥占を扱っていて、それらが讖緯にまさるといえるのか。時代が衰え三國・兩晉に至ると、文の氣は日々だめになる。古人は文を作り詩を作るのに、多くは前人をまねて作った。長いこと學べば、おのずと熟達するからだ。司馬相如の「封禪書」などは、模倣作がたいへん多い。柳子厚はそうした状態を見て、「貞符」を作って反撥したけれども、その文體もやはり蹈襲を免れていない。萬人傑記す。以下、漢の文。

(校勘) 朝鮮古寫本 人傑。漢文(末尾) ↓ 缺

(注) 賈誼については他の箇所「賈誼之學雜。他本是戰國縱橫之學、只是較近道理、不至如儀秦蔡范之甚爾」(戰國漢唐諸子「一三七・325」)などと評されている。

晁錯の「答制策」については、『漢書』本傳に「賢良文學對策」「上書言皇太子宜知術數」「上書言兵事」などが見られる。

董仲舒の「答賢良策」は『漢書』卷五九本傳に「武帝即位、舉賢良文學之士前後百數、而仲舒賢良對策焉」とあるのを指し、本文もこの傳に載録される。

楊震は、『後漢書』卷五四本傳に、「明經博覽、無不窮究、諸儒爲之語曰、關西孔子楊伯起」という。楊震がとくに讖緯を尊んだというよりは、この時代の風氣としてそうであった。「張平子非之」は、『後漢書』卷五九張衡傳に「請禁絕圖讖疏」が載録されることを踏まえ、さらにその文に「且律歷・卦候・九宮・風角數有徵效、世莫肯學、而競稱不占之書。」とあることから、「却理會風角・鳥占」と評したものであろう。

「風角」は、『後漢書』卷三十下郎顗傳注に「風角、謂候四方四隅之風、以占吉凶也」とあり、『隋書』經籍志三子部「五行」には、「風角」を題に含む多くの書が録される。

「鳥占」は、「鳥情」「鳥情占」ともいい、鳥の鳴き聲による占術をいう。「風角」と併稱されることも多く、同じく「五行」に「鳥情」を題に含む書がいくつか録される。

「陵夷至於三國兩晉、則文氣日卑矣」のような文學史觀は唐代よりしばしば見られるところだが、その一例として韓愈の「薦士」詩を舉げておく。「周詩三百篇、雅麗理訓誥。曾經聖人手、議論安敢到。五言出漢時、蘇李首更號。東都漸瀾漫、派別百川導。建安能者七、卓犖變風操。逶迤抵晉宋、氣象日凋耗。中間數鮑謝、此近最清奧。齊梁及陳隋、眾作等蟬噪。搜春摘花卉、沿襲傷剽盜。國朝盛文章、子昂始高蹈。勃興得李杜、萬類困陵暴。後來相繼生。亦各臻闡奧。有窮者孟郊、受材實有驚。……」

柳宗元「貞符」はその序に「自司馬相如・劉向・揚雄・班彪・彪子固、皆沿襲嗤嗤、推古瑞物以配受命、其言類淫巫瞽史、誑亂後代、不足以知聖人立極之本、顯至德、揚大功、甚失厥趣。」（『柳宗元集』卷一）という。

12 司馬遷文雄健、意思不帖帖、有戰國文氣象。賈誼文亦然。老蘇文亦雄健。似此皆有不帖帖意。仲舒文實。劉向文又較實、亦好、無些虛氣象。比之仲舒、仲舒較滋潤發揮。大抵武帝以前文雄健、武帝以後更實。到杜欽谷永書、又太弱無歸宿了。匡衡書多有好處、漢明經中皆不似此。淳。

司馬遷の文章は力強く、意氣はおとなしくなくて、戦國の文の氣象がある。賈誼の文章もそうだ。老蘇の文章も力強い。こうしたものにはみなおとなしくないところがある。董仲舒の文章は中身がある。劉向の文章もまたなかなか中身があつて、立派であり、うわべばかりの氣象など少しもない。仲舒とくらべると、仲舒のほうがややうるおいがあつて活發だ。だいたい武帝以前の文章は力強く、武帝以降にずっと中身のあるものになる。杜欽や谷永の文章は、弱

弱しすぎてしまりがいい。匡衡の文章には立派なところが多、漢の明經博士のなかにこうした人はいない。陳淳記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 武帝以後更實↓武帝以後便實 無歸宿↓無收宿

（注） 文章を「雄健」と評することは、白居易「馮宿除兵部郎中知制誥制」に「爲文甚正、立意甚明、筆力雄健、不浮不鄙」、朱熹「跋許侍郎詩卷」（『朱子文集』卷八四）に「觀其長篇大句、固自雄健豪逸、磊落驚人」とある。

劉向の傳（『漢書』卷三六 楚元王傳）には「向字子政。本名更生。……更生以通達能屬文辭、與王褒・張子僑等並進對、獻賦頌凡數十篇」という。

老蘇すなわち蘇洵の文章については、「論文」上の後半に詳しいが、蘇軾についても「坡文雄健有餘、只下字亦有不貼實處。」（一三九・332）などのようによく似た評をする。この「貼實」と本條の「帖帖」は類似の意味をもつと考えられ、ともに「じつとしてゐる」「おとなしくしてゐる」という意に解される。

杜欽・谷永はそれぞれ『漢書』卷六〇及び卷八五に傳があり、どちらにも多くの對策が載録されている。

「歸宿」は、落ち着きどころ。『語類』にも「若博文而不約之以禮、便是無歸宿處」（『論語十五 雍也篇四』三三・333）などの例が散見される。



「明經博士」は、ここでは廣く漢の儒者たちをいったものだろう。なお漢代の學術に關する朱子のことばは、『語類』には以下のごとくであり、匡衡の名も見える。「劉淳叟問、『漢儒何以溺心訓詁而不及理。』曰、『漢初諸儒專治訓詁、如教人亦只言某字訓某字、自尋義理而已。至西漢末年、儒者漸有求得稍親者、終是不曾見全體。』問、『何以謂之全體。』曰、『全體須徹頭徹尾見得方是。且如匡衡問時政、亦及治性情之說。及到得他入手做時又却只修得些小宗廟禮而已。』」（一三七・3263）

匡衡は『漢書』卷八一に傳があり、多くの上疏文を載録する。

13 仲舒文大概好、然也無精彩。淳。

董仲舒の文章はおおむねよい。だがやはりぱっとしない。陳淳記す。

（校勘）朝鮮古寫本 無精彩の後に、「楊雄老氏之學如藏心於淵 便是」さらに第58條の「老氣衰」以下が若干の異同を伴いながら續く

（注）「精彩」については第1條の注を參照。

14 林艾軒云、司馬相如賦之聖者。揚子雲班孟堅只填得他

腔子、佐錄作腔子滿。如何得似他自在流出。左太冲張平子竭盡氣力又更不及。可學。

林艾軒がいった。「司馬相如は賦の聖人だ。揚子雲や班孟堅はただ彼の型を充たしただけだ（蕭佐の記録は「腔子滿」に作る）。どうして彼のように自在に流れてゆくことができよう。左太冲や張平子が力をふりしほっても、やはり及びもつかない。」鄭可學記す。

（注）林艾軒は第3條注を參照。

「腔子」は、ここでは文章の型枠のごときものをいう。「近思錄」卷一に「滿腔子是惻隱之心」とあり、葉采の集解は「腔子、猶軀殼也」とし、また、『語類』本篇にも「陸教授謂伯恭有箇文字腔子。才作文字時、便將來入箇腔子做。文字氣脈不長」（332）という。

「班孟堅」「揚子雲」「張平子」「左太冲」、すなわち班固・揚雄・張衡・左思を擧げるのは、いうまでもなくそれぞれが散體の大賦たる「京都」もしくは「畋獵」の賦の作者として司馬相如を繼がんとする者だからである。『文選』では卷一より卷九までにこれらの作が收められる。

15 問、呂舍人言、古文衰自谷永。曰、何止谷永。鄒陽獄

中書已自皆作對子了。又問、司馬相如賦似作之甚易。曰、然。又問、高適焚舟決勝賦甚淺陋。曰、文選齊梁間江總之徒、賦皆不好了。因說、神宗修汴城成、甚喜。曰、前代有所作時、皆有賦。周美成聞之、遂撰汴都賦進。上大喜、因朝降出、宰相每有文字降出時、即合誦一遍。宰相不知是誰、知古賦中必有難字、遂傳與第二人、以次傳至尙書右丞王和甫、下無人矣。和甫即展開琅然誦一遍。上喜。既退、同列問如何識許多字。和甫曰、某也只是讀傍文。揚錄作一邊。呂編文鑑、要尋一篇賦冠其首、又以美成賦不甚好、遂以梁周翰五鳳樓賦爲首、美成賦亦在其後。

「呂舍人は、古文は谷永から衰えたといいましたが」と訊ねたところ、いわれるには、「谷永だけじゃあるまいさ。鄒陽の獄中の書もすでにみな駢體になっている。」さらに「司馬相如の賦はたいへん簡單に作っているようですね」と訊ねると、「そうだ」といわれた。さらに「高適の『焚舟決勝賦』はたいへん淺薄なものですな」と訊ねると、いわれるには、『文選』で齊梁のころの江總などの連中は、賦はみなだめになるとる」。ついでにいわれるには、「神宗

は汴京城の修築が完成したとき、いたくお喜びになって、「昔は事を爲し遂げたときは、賦を作ったものだ」といわれた。周美成はそれを聞くと、「汴都賦」を作つて獻上した。帝は大いに喜ばれて、朝廷でそれをお下しになった。宰相は文章が下されたときはいつも、一通り朗誦することになつていたが、宰相は誰の作とも分からず、古賦には難しい字が必ずあると思つて、次席の者に渡し、つぎつぎに渡つて尙書右丞の王和甫まで來ると、もうあとには誰もいない。和甫はすぐさま廣げて朗々と誦し終え、帝は喜ばれた。退出してから、同座の者が、どうしてそんなに多くの字を知っているのかと訊ねると、和甫は「わたしはただ旁つらを讀んだだけです」といったそう。呂が『皇朝文鑑』を編んで、卷頭に置く賦一篇を求めたとき、美成の賦をあまりよくないとして、そこで梁周翰の『五鳳樓賦』を卷頭におき、美成の賦は後ろに置いた」。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 江總↓江惣 上喜↓士喜

(注) 「呂舍人」は、呂祖謙。『宋史』卷四三四本傳に、

「呂祖謙字伯恭。……先是、書肆有曰聖宋文海、孝宗命臨安府校正刊行。學士周必大言文海去取差謬、恐難傳後。蓋委館職銓擇、以成一代之書。孝宗以命祖謙、遂斷自中興以前、崇雅黜浮、類爲百五十卷、上之。賜名皇朝文鑑」という。

「鄒陽獄中書」は、「漢書」卷五一本傳に「鄒陽、齊人也。……勝等疾陽、惡之孝王怒、下陽吏、將殺之。陽客游以讒見禽、恐死而負累、乃從獄中上書曰、臣聞忠無不報、信不見疑、臣常以爲然、徒虛語耳。昔荆軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之。衛先生爲秦畫長平之事、太白食昂、昭王疑之。……」とあり、朱子のいう「對子」とは、傍點を加えた箇所などを指しているよう。

現存する高適の作のなかに「焚舟決勝賦」なるものはなく、またそれに類するものも見當たらない。あるいは高適に「濟河焚舟賦」(『全唐文』卷二七六)とある作の誤りか。高適は『全唐文』に「中宗初年人」、すなわち八世紀初頭の人という。

「文選」には江總の作はとられておらず、あるいは江淹の誤りかとも思われ、和刻本が「總」を「淹」に作るのも意を以て改めたものだろう。いずれにせよこの文脈においてさして違いはなく、しばらく諸本にしたがう。

「周美成」は周邦彥のこと。その「汴都賦」にまつわるこのエピソードについては「直齋書錄解題」卷一七にも以下のような記事がある。「世傳賦初奏御、詔李清臣讀之、多古文

奇字、清臣誦之如素所習熟者、乃以偏旁取之爾。」なお、「汴都賦」は前漢以來の「京都賦」のスタイルを踏襲した長大な作であり、「宋文鑑」が「文選」に倣うとすれば、まず巻頭に置くべき候補となる作である。にもかかわらず巻七に置かれていたというところに「汴都賦」への評價があらわれているよう。

「王和甫」は王安禮のこと。「宋史」卷三三七に「王安禮字和甫、安石之弟也。……元豐四年、初分三省、置執政。拜中大夫尚書右丞」という。

「梁周翰」の傳は「宋史」卷四三九文苑傳に見え、「梁周翰字元褒。鄆州管城人。……乾德中獻擬制二十篇。擢爲右拾遺。會修大內、上五鳳樓賦。人多傳誦之。」という。

16 賓戲解嘲劇秦貞符諸文字、皆祖宋玉之文、進學解亦此類。陽春白雪云云者、不記其名、皆非佳文。揚。

「賓戲」や「解嘲」や「劇秦美新」や「貞符」などの文章は、みな宋玉の文章を祖としている。「進學解」もこの仲間だ。陽春白雪がどうのこうのいうのは、誰の作かも分からん。どれもつまらん作品だ。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「文選」には卷四五「對問」に宋玉「對楚王問」、同

卷「設論」に班固「答賓戲」、揚雄「解嘲」を載せ、卷四八「符命」に揚雄「劇秦美新」を載せる。前二者は問答體によつて論を構成するものである。「進學解」(「韓昌黎文集」卷十二)もまた、問答によつて文章が組み立てられているため、朱子はこのようにいったのだらう。

「陽春白雪」は、宋玉の「對楚王問」に「其爲陽春白雪、國中屬而和者不過數十人」とあることから語がそこに及んだものかとも思われるが、朱子が何をいわんとしたものかはやはり定めがたい。

17 夜來鄭文振問西漢文章與韓退之諸公文章如何。某說、而今難說。便與公說某人優、某人劣、公亦未必信得及。須是自看得這一人文字某處好、某處有病、識得破了、却看那一人文字、便見優劣如何。若看這一人文字未破、如何定得優劣。便說與公優劣、公亦如何便見其優劣處。但子細自看、自識得破。而今人所以識古人文字不破、只是不曾子細看。又兼是先將自家意思橫在胸次、所以見從那偏處去、說出來也都是橫說。又曰、人做文章、若是子細看得一般文字熟、少間做出文字、意思語脈自是相似。讀得韓文熟、便做出韓文底文字、讀得蘇文熟、便做出蘇文底文字。若不曾子細看、

少間却不得用。向來初見擬古詩、將謂只是學古人之詩、元來却是如古人說「灼灼園中花」、自家也做一句如此、「遲遲澗畔松」、自家也做一句如此、「磊磊澗中石」、自家也做一句如此、「人生天地間」、自家也做一句如此。意思語脈、皆要似他底、只換却字。某後來依如此做得二三十首詩、便覺得長進。蓋意思句語血脈勢向、皆效它底。大率古人文章皆是行正路、後來杜撰底皆是行狹隘邪路去了。而今只是依正底路脈做將去、少間文章自會高人。

ゆうべ鄭文振が「西漢の文章は韓退之諸公の文章と比べてどうでしょうか」と訊ねたので私はこういった、「今はちよつといえない。もし君にだれそれがすぐれてだれそれが劣るといったところで、君は必ずしも信じまい。自分である人の文章のどこがよくてどこがわるいかを讀みとり、きちんと見きわめた上で別の人の文章を讀むと、文章の優劣がよく分かる。一人の文章が見きわめられなければ、どうして優劣を判斷できよう。君に優劣をいつてみたところで、君はどうしてその優劣のありかが理解できよう。くわしく自分で讀んでこそ、よく見きわめることができる。今

の人が古人の文章をよく見きわめられないのは、ただくわしく讀まないからだ。それに最初から自分の考えで頭を塞いでいるものだから、その偏見から考えることになるし、物をいってもすべてでたらしめる」とな。さらにいわれるには、「文を書くとき、もし何かの文をくわしく熟讀しておけば、そのあとで書いた文は、考えも文脈もおのずと似てくる。韓愈の文を熟讀すれば、韓愈の文になるし、蘇軾の文を熟讀すれば蘇軾の文になる。くわしく讀まなければ、あとで役には立たない。以前初めて擬古詩を讀んだとき、古人の詩を眞似ただけのものではないかと思ったが、實は古人が「灼灼たる園中の花」と詠んでいたら、自分もそのような句を作り、「遲遲たる澗畔の松」とあつたら、自分もそのような句を作る。「磊磊たる澗中の石」とあつたら、自分もそのような句を作り、「人 天地の間に生まる」とあつたら、自分もそのような句を作るのだ。考えも文脈も、みな似せるようにして、ただ文字だけを替えるのだ。私はのちにこうやって二三十首の詩を作ったが、上達したと感じた。それは考えやことば文脈や勢いなど、みな

それに倣ったからだ。だいたい古人の文章はみな正道を行っており、のちのいい加減につくったものはみな狹隘な邪道に踏みこんでしまった。いま正しい道筋に従って作りさえすれば、やがて文章はおのずと人に勝るようになるう。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 但子細自看↓但仔細自看

（注）「鄭文振」は鄭南昇（升）のこと。「朱子語錄姓氏」は「癸丑」すなわち紹熙四（一一九三）年の記録者とする。

また、「宋元學案補遺」卷六九には、「紹興中、朱子倡道東南與郭叔雲、同往從之」（紹興は紹熙の誤り）という。『師事年攷』207。

韓愈を漢代の學者と比較したものとして、『語類』戰國漢唐諸子篇は朱子のことばをいくつか載せ、「先生令學者評董仲舒・揚子雲・王仲淹・韓退之四子優劣」（3260）などの記述も見られる。

「横説」は、でたらめ。『語類』に類出する。

「將謂……、元來……」は、「……だと思っていたら、實は……であつた」の意。「將謂、黄某如何、元來只是分武寧一茶客。」（本朝四 自熙寧到靖康用人）一一〇・3120）

「灼灼園中花 遲遲澗畔松」は、この句そのものは、宋・范質の「戒從子杲」詩に「灼灼園中花 蚤發還先萎。遲遲澗畔松、憂憂含晚翠」とあるものと同じだが、朱子の意圖する

ところは、次に引く例を見ると、むしろ「古詩十九首」其二に「青青河畔草、鬱鬱園中柳」とあるのを引かんとしたのかもしれない。

「磊磊澗中石、人生天地間」は、「古詩十九首」其三に「青靄上柏、磊磊澗中石 人生天地間、忽如遠行客」とあるのによる。

「血脈」が詩について比喩的に使われる例としては、朱子よりいささか年少の姜夔の『白石道人詩說』の冒頭に「大凡詩自有氣象・體面・血脈・韻度。氣象欲其渾厚、其失也俗。體面欲其宏大、其失也狂。血脈欲其貫穿、其失也露。韻度欲其飄逸、其失也輕。」というのをやはり擧げておくべきだろう。

又云、蘇子由有一段論人做文章自有合用底字、只是下不著。又如鄭齊叔云、做文字自有穩底字、只是人思量不著。橫渠云、發明道理、惟命字難。要之、做文字、下字實是難。不知聖人說出來底、也只是這幾字、如何鋪排得恁地安穩。或曰、子瞻云、都來這幾字、只要會鋪排。然而人之文章、也只是三十歲以前氣格都定、但有精與未精耳。然而掉了底便荒疏、只管用功底又較精。向見韓無咎說、它晚年做底文字、與他二十歲以前做底文字不甚相遠、此是它自驗得如此。人

到五十歲、不是理會文章時節。前面事多、日子少了。若後生時、每日便偷一兩時閑做這般工夫。若晚年、如何有工夫及此。或曰、人之晚年、知識却會長進。曰、也是後生時都定、便長進也不會多。然而能用心於學問底、便會長進。若不學問、只縱其客氣底、亦如何會長進。日見昏了。有人後生氣盛時、說盡萬千道理、晚年只恁地闌輟底。或引程先生曰、人不學、便老而衰。曰、這一句說盡了。

またいわれた、「蘇子由に一篇の論があつて、「人が文章を書くときには、おのずと用いるべき字があるのだが、ただそれを書きつけれないのだ」という。また鄭齊叔がいうには、「文を書くにはおのずと妥當な字があるのだが、ただ人がそれを思いつかないだけだ。」横渠は、「道理を明らかにするとときには、文字にあらわすことを難しい」といった。要するに、文章を書くには、文字にあらわすことがまことに難しいのだ。聖人がいわれたことも、ただこのいくつかの文字なのだが、どうしてこんなにじっくり並べられてゐるのだろうか。（子瞻は「とにかくこのいくつかの文字を、きちんと並べることだ」といっているともいう。）しかし文

章というものは、もっぱら三十歳以前に氣格がすっかり定まってしまう、あとは精密かそうでないかの違いだけになる。とはいえ、いいかげんにしている者はでたらめになるし、ひたすら努力する者はかなり精密になる。いつか韓無咎に會つたとき、彼が年をとつて書いた文章は、二十歳以前に書いた文章とそれほど違わないといつていたが、これは彼自身でそれを證明してみせたのだ。五十歳にもなれば、文章にかかわっている時期ではない。目前に爲すべきことは多く、時間は少ない。若いときなら毎日數時間のひまを盗んでこんな努力をしようが、年をとると、そんなひまがあるものか。」ある人がいうには、「年をとれば知識は進歩するでしょう。」いわれるには、「それも若いときにみな決まることで、進歩したとて多くは望めない。しかし學問に心を碎くことができる者は、進歩もしよう。學問をせずに、血氣にまかせるだけなら、どうして進歩できよう。日に日にだめになってゆくさ。若い盛りのときにたくさん道理を説きまくつたのに、年をとつてからすっかりわやになつてしまふ者もある。」ある人が程先生のことを引いて、

「人 學ばざれば、すなわち老いて衰う、ですな」といふと、いわれるには、「その一句につきる。」

（校勘）朝鮮刊本閑↓間

（注）「蘇子由有一段論」は、蘇轍のどの文章を指すか、未詳。

「鄭齊叔」は、未詳。

「橫渠云」は張載のことばとして他に錄されているか、未詳。

「子瞻云」は蘇軾のことばとして他に錄されているか、未詳。

「韓無咎」は、韓元吉のこと。『宋元學案』卷二七「和靖學案」「尙書韓南澗先生元吉」に「學于和靖而友朱子、東萊其壻也」とある。和靖は伊煥、東萊は呂祖謙。

「闡報」は、だらんとしていること、しゃんとしていないこと。「塌踖」「踏踖」とも。吳曾『能改齋漫錄』卷二に「俗語以事之不振者爲塌踖、唐人已有此語。西陽雜俎」「錢知微賣卜、爲韻語曰、足人塌踖、不肯下錢。」。「語類」本篇にも、「文字奇而穩方好。不奇而穩、只是闡報。」（3321）

「程先生」の語は、『河南程氏遺書』卷七に「不學、便老而衰」とあり、『近思錄』卷二に同じ文を引くのと同じ。ただしこの語が二程のうちどちらのことばかは不明。

又云、某人晩年日夜去讀書。某人戲之曰、吾丈老年讀書、

也須還讀得入。不知得入如何得出。謂其不能發揮出來爲做文章之用也。其說雖粗、似有理。又云、人晚年做文章、如秃筆寫字、全無鋒銳可觀。又云、某四十以前、尙要學人做文章、後來亦不暇及此矣。然而後來做底文字、便只是二十左右歲做底文字。又云、劉季章近有書云、他近來看文字、覺得心平正。某答他、令更掉了這箇、虛心看文字。蓋他向來便是硬自執他說、而今又是將這一說來單、正是未理會得在。大率江西人都是硬執他底橫說、如王介甫陸子靜都只是橫說。且如陸子靜說文帝不如武帝、豈不是說。又云、介甫諸公取人、如資質淳厚底、他便不取、看文字穩底、他便不取。如那決裂底、他便取、說他轉時易。大率都是硬執他底。○

またいわれた、「ある人が年をとってから日夜讀書に勵んでいた。他の人がからかつていうには、『ご隠居の老いの讀書も、きつと身につくことでしょう。だが身についたものをどうやってお出しになるのでしょうか。』これは、文章をつくるのに役立てられないことをいっているのだ。がさつな言い方だが、道理はありそうだ。」またいわれた、

「年をとってから文章を書いて、ちびた筆で字を書くようなもので、見るべき鋭さはちつともない。」またいわれた、「私は四十歳までは、まだ人に倣って文章を作ろうとしていたが、のちにはそんな暇などなくなってしまうた。しかしのちに作った文章でも、二十歳前後で作った文章そのままだ。」またいわれた、「劉季章が最近手紙を寄こして、近ごろ文章を読むと心が落ち着きます、などという。わたしは返事を出して、さらにその考えを捨てて虚心に文章を読むようにさせた。というのも、彼はこれまでかたくなに自説にこだわってきたが、いままたその説で萬事を押し通そうとしていて、まったくわかっちゃいない。だいたい江西人は、みな自分のでたらめに固執するもので、王介甫や陸子靜などはみなでたらめばかりだ。たとえば陸子靜は文帝は武帝に及ばないなどといっているが、でたらめもいいところだ。」またいわれた、「介甫などの諸公が人を取るとき、氣質の篤實な者は取らず、文章の穩健な者は取らない。むちゃくちゃなものなら、取って、じきに變わるさ、という。だいたいみな自分の考えに固執しているのだ。」呂熹記す。



（校勘）朝鮮古活字本 其說雖粗似有理↓（雙行細字） 正身未理會得在↓正是未理會得在（本文はこのテキストによって改めた）

（注）「禿筆」は、ちびた筆。筆力のないさまをいう。

「其說雖粗、似有理」は、諸本は細字雙行に作り、あたかも記録者の案語のごとくであるが、文意をとって朱子のことばとして解した。

「劉季章」は、朱子の門人、劉黼のこと。「宋元學案」卷五九「清江學案」、「宋史」卷四百五。「朱文公文集」卷五三には劉黼にあたえた書簡が二十通あまり載録されるが、そのうちの第十七首に、以下のようにいう。「……來喻所云、書能益人與否、只在此心等說、此又是病根不會除得。以鄙見觀之、都無許多閑說、只著實依文句玩味、意趣自深長、不須如此。……只是渠肯聽人說話、依本分循次序、平心看文字。不敢如此、走作閑說耳。大率江西人尙氣、不肯隨人後、凡事要自我出、自由自在、故不耐煩如此。逐些理會、須要立箇高論、籠罩將去。……只如臨川前後一二公、巨細雖有不同、然原其所出、則同是。此一首見識、可以爲戒、而不可學也。……」ここにいう「臨川」はむろん王安石のこと。王安石も陸九淵も江西人である。

「說文帝不如武」は、陸九淵「問漢文武之治」（『象山先生集』外集）を指している。ただし、陸九淵は『尚書』洪範の「沈潜剛克、高明柔克」なる語を發端に、文帝と武帝を比較

して前者を「柔」後者を「剛」とした上で、武帝が「剛」に失したことをより惜しむとするもので、文帝が武帝に及ばないなどと直接に論じているわけではない

「決裂」は疊韻の語。ばらばら、めちやめちや。支離滅裂。

18 張以道曰、盼庭柯以怡顔、盼、讀如俛、讀作盼者非。

義剛。

張以道がいった、「庭柯を<sup>なが</sup>盼めて以て顔<sup>よう</sup>を怡<sup>よ</sup>ばす」の「盼」は「俛」に讀むもので、「盼」に讀むのはあやまりだ。」黄義剛記す。

（注）「張以道」は、『朱子文集』卷七および卷九にその名が見え、『嘉靖建陽縣志』に建陽の知縣であつたことが錄されるが、詳細は不明。

「盼庭柯以怡顔」は「歸去來兮辭」の語。「盼」にはいくつかの音があり、その讀みによって意味も變わるので、このようにいったもの。現行「陶淵明集」は、「盼」を「眄」に作つて意味の辯別を明らかにしており、いま傳えられる諸本に異同はないようだが、朱子の見たテキストはおそらく「盼」となつていたのであらう。なお底本は現行「陶淵明集」によつて「盼」を「眄」、「盼」を「盼」に改めるが、妄改の譏りを免れまい。

19 韓文力量不如漢文、漢文不如先秦戰國。揚。

韓愈の文章の力は漢代の文章に及ばない。漢代の文章は  
先秦・戦國の文章に及ばない。包揚記す。

譯注者後記 この譯注は、齋藤が起草した原案をもとに、執筆  
筆者三人が検討を加え、齋藤がそれらを整理して稿を成した。  
なお、本稿作成の過程で、西岡淳、副島一郎、周雲喬、谷口  
一郎、原田直枝の諸君による譯注の草稿を参照した。謝意を  
表す。